

個性豊かな各地域が響き合う 夢のある田園交流都市づくり

歴史的な地縁が結んだ 8市町村の大型合併

平成の大合併に伴い、面積1000km以上の超大型市が全国に続出した。平成17年3月に1市6町1村（旧大曲市、神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町、太田町）の合併で誕生した大仙市は面積約867km²。現状では超大型とはいえないものの、従来の感覚からすれば非常に大きな都市である。

市政ルポではこれまで面積1000km²以上の都市の取材も何度か実施してきた。しかし、大仙市内を移動しているときの広さの印象には、それらの超大型市に匹敵するものがある。それは全国有数の穀倉地帯・秋田県内においても、大仙市が代表的な米どころだという事情に由来している。日本の原風景とされる田園風景が、刈り入れ直後の時期だったということも手伝って、見渡す限り続いていたのだ。さらに田園地帯に水を供給する雄物川水

系の大小河川が、市域を縦横に走っている。それらの要素が相まって風景的な開放感は傑出してている。

今回の主要取材地は市中心部の旧大曲市地域だったが、同様の景観が、ほかの地域ではより一層のスケールで展開されている。

「1市6町1村の合併というと、市民の一体化や職員の融合などがさぞかし大変でしょうとよくいわれます。でも田園風景に境界線がないように、この周辺地域は行政区分とは関係なく昔からさまざまな地縁で結ばれてきたのです。そういう意味で今回の合併は、成るべくして成った結果といえるでしょう」

そう語るのは栗林次美大仙市長である。大仙市は隣接する仙北市（2町1村で合併）、美郷町（2町1村で合併）と共に古くから、1市10町3村による大曲仙北広域圏（旧大曲市と旧仙北郡）を形成してきた。大曲仙北広域圏は平成の大合併により、行政区分上では3分割されたが、消防・救急、斎場、障



栗林次美
大仙市長

害者対策関係の各種施策、介護保

険などの広域行政で今も深く連携している。この大曲仙北広域圏もまた雄物川水系の水利を活用し、田園地帯を共に形成してきたという地縁を持つ。さらに昭和前半期までさかのぼれば、雄物川を通じて人・モノ・情報が活発に行き交い、農業経済・商業経済を含む地域文化圏が根強く共有されてきた。

「強い地縁で結ばれた合併ですが、旧町村部の一部住民の皆さんには、やはり予算は中心部（旧大曲市）を中心に投下されるのではないかと懸念もあつたようです。そうした声は合併後3年目ぐらいまで聞かれましたが、

本年に入ってからあまりなくなりました。市長および2人の副市長、それに職員たちが機会あるごとに各地域に向き、新生大仙市を各地域の協働で盛り上げ、みんなで良くなることを目指していこうという市の姿勢を、丁寧に説明し続けてきた成果だと思っています」（栗林市長）

新市のスタートに当たり、中でも市長・副市長、市の職員たちが精力的に足を運び説明を行った場がある。大仙市独自の取り組みに満ちた「地域協議会」の集まりだ。

地域協議会による 市民協働のまじりこみ

地域協議会は「大仙市地域自治区の設置等に関する条例」（平成17年3月の合併直後に施行）で、地域自治区と定められた旧8市町村地域に一つずつ設置されている。平成の大合併以後、地域住民が市民協働のまちづくりを進める際の拠点として全国各地に誕生した地域協議会・地区協議会は、名称は同様でも、その都市の実情に応じたさまざまな特色を備えている。大仙市における地域協議会（平成18年開始）は、地域の活性化のため配分した予算の用途について協議する機能を持つという点で全国的にも非常にユニークな試みを行っている。

「旧大曲市地域には年間1000万円、ほかの地域には500万円ずつの地域予算を配分しています。その予算を財源に、各地域住



年々盛んになる市民協働事業。八乙女山を守る会による「八乙女山復活大作戦」にも多くの住民が参加

民の力で地域の身近な課題の解決や、ボランティアなどの人材育成に努めていただくのが主な趣旨です。この考え方は、当時全国的にも珍しいものであったと記憶しております。平成18年にこの予算方式を採用しておりますが、以来、各地域から選出された協議会委員の皆さんと一緒に、より良い制度の運用について知恵を絞り、試行錯誤しながら現在に至っております」（栗林市長）

各地域自治区は地域協議会と事務所（総合支所）で構成されている。協議会委員は地域

ごとに約20名おり、任期は4年。地域のまちづくりに関して市長からの諮問に意見を述べたり、地域の課題解決についての提言を行う。

毎年8月に開催される全国花火競技大会（大曲地域・雄物川河川敷）には日本最高峰の花火師が集う

(秋田県)



鮭の稚魚放流は小学生の社会学習の一環にも活用

な集落営農組織の構築を推進しはじめた。農地も農業機械も集落単位で管理・購入し、共同作業で労働力の集約化・合理化を図ろうという試みだ。同時により強固な経営基盤を作るため、農業法人の構築も推進している。その結果、現在までに集落営農組織は69組織、農業法人は52法人が誕生するなど順調に推移している。だが既存農家の組織化だけではまだ足りないという。

その意見、提言は適宜、行政に反映されていく仕組みだ。同時に行政情報も極力開示され、地域協議会を通じて市民にも迅速に伝わる。地域協議会は合併による市民の不安を取り除くとともに、住民と行政が共に汗を流し、知恵を絞り合うことで住みよい地域づくりが行われる拠点でもある。連帯感の醸成による大仙市民としての一体化、住民リーダーの育成、行政職員の融合などにも、効果を徐々に発揮しつつある。

当然のことながら、これらの事業は厳しい行政改革の中で行われている。市民や職員には、市の置かれた厳しい財政状況を肌で知る機会にもなるはずだ。」ところが……と栗林市長は苦笑する。

「市民の皆さんには非常に敏感に、市の置かれた状況を理解していただけるようになりました。その点、肝心の職員は市民に比べ、全体的にのんびりしているというのが偽らざる印象です。有効求人倍率が限りなくゼロに近づきつつあるという環境のなか、懸命に生活維持の苦勞をされている市民の皆さんの意識の方が、やはりどうしてもいろいろな意味で敏感になるのかもしれない」

そのために、職員の士気を高め、組織を活性化させ、大仙市の一体性を進める観点から、毎年本庁と支所ならびに支所相互間で積極的な人事交流を行い、現代の行政職員としてのスキルアップと意識付けが図られている。地域協議会の在り方も、最初は予算を消化する

ので手いっぱいだったが、今では綿密な振興計画を作って意欲に満ちた実験事業を行う事例なども、少しずつ出てきている。そうした事業のうち、大仙市全体の事業としても活用できるような実績を挙げた地域には今後、インセンティブに近い予算増も検討されているという。

農業振興と地域資源を 活用したまちづくり

日本有数の穀倉地帯としての大仙市の際立った特徴は、米作に特化してきたことにある。農業産出額は常に県内トップクラスだが、現在でも品目別には米が約70%を占めており、特に平成初期まではほとんど米作専門だった。

「それだけ大仙市の位置する仙北地方は高品質な米作に適していたということなのですが、米価が下がると、収入が一気に減るという危険性に常に付きまとわれていました。それではいけないというので、近年はアスパラ、枝豆、ホウレンソウ、大豆などの畑作物にも力を入れていきます。しかし、いまだに米作依存から脱却はできず、米価の長期低落傾向をカバーするには至っていません。高齢化の進行や後継者不足もあります。もう農家個々の努力だけでは、地域の農業を立て直すことは無理な状態にあるといえます」(栗林市長)

大仙市では基幹産業である農業の立て直しのため、数年前から農家に呼び掛け、本格的

そこで大仙市では、市内に現在いる約1500人の認定農業者のさらなる組織化とともに、市が設立した研修センターで新規就農者の育成にも取り組んでいる。その結果、ここ数年の実績を見ても毎年10人前後の新規就農者が生まれている。

とりわけ大仙市の場合、地域内で生まれ育ち、農業に子どもころから親しみをもち、なおかつ就農の希望を持っている人材ばかりを募集し、育成しているところが特徴的だ。そういう人材を選んで研修させると100%就農するという。職業としての農業に対する認識が最初からできているからだと思われる。

「現在、大仙市のように新規就農者のための研修センターを自前で持つ自治体は、県内でもわずかです。今後は県全体で同様の試みを行う必要があるでしょう。秋田県は近い将来、高齢化率が全国トップになるといわれています。それだけに新規就農者の育成と組織化、法人化などを進めていかないと、米作中心の体質が根強い秋田県の農業は早晩、立ち行かなくなる恐れもあるのです。同様のことは農業だけでなく、一般の雇用対策全般にもい



米の取扱量日本一を誇る「JA秋田おほこ」のライスターミナルには圏域の米が集まる



見渡す限りの田園地帯が大仙市の典型的風景

ます(栗林市長)

前述したように穀倉地帯としての大仙市を支え、大仙市の景観に潤いを与えているのは、雄物川水系の大小河川がもたらす豊富な水量だ。だが市内を縦横に走る河川からの恩恵は、農業や景観以外にも多方面に及んでいる。

今回の取材ではその貴重な恩恵の代表、玉川(雄物川の支流)を遡上する鮭の漁と採卵、受精作業も見学することができた。

また大仙市では河川沿いの自然に恵まれ



雄物川の鮭漁。独特のウライ(仕掛け)で捕れた鮭は採卵され、翌春放流される稚魚に育つ

(秋田県)



障害者の作業所が附属する福祉店舗「ほっぺ」は福祉のまちづくりの象徴でもある



高齢者用住宅と一般用住宅が一体化した大花都市再生住宅(大曲地域)の1階には、子育て支援施設「まるこのひろば」も同居

用したにぎわい創出施設「花火庵」(管理運営・TMO大曲)がある。店内には打ち上げ花火に関連した展示物が楽しい「大曲花火屋」コーナー、市民の交流拠点として地域ボランティアが運営する「のびのびらんど」が同居しており、常に旅行者や市民の談笑が絶えない。花火通りにほまた、工芸室、温水プール、トレーニングルーム、教養室などを備え、市民の心身の健康保持増進につながる各種生涯学習講座が実施される大仙市健康文化活動拠点センター「ペアーレ大仙」(管理運営・TMO大曲)もある。

その前を進むと、NPO障がい者自立生
られつつある。
このように多様なにぎわいを備えた中心市街地を一步出ただけで、前述の雄大な穀倉地帯や雄物川水系の大自然が現れてくるのが、大仙市の多彩な魅力の大きな特色だ。
1市6町1村の合併が決まり、新市建設計画が策定された際に掲げられた都市像は「おおきなせなかに 夢を乗せ 未来に羽ばたく元気なまち」というものだった。「おおきなせなかに」と



鍋料理のコンテストとして知られる「平成鍋合戦」で第14代鍋将軍に輝いた「大曲の納豆汁」



メンバー9人の年齢が合計で500歳を超えないと出場できない「500歳野球」は170チーム(約4,000人)も出場する大仙市の恒例行事

活センター「ほっと大仙」が運営する福祉店舗「ほっぺ」がある。「ほっぺ」の1階店舗では駄菓子や軽食が販売され、2階の作業所では「ほっと大仙」に登録している障害者たちがアクセサリーなどの受託製作を行っている。
花火通りの周辺では区画整理事業が進み、中心市街地活性化基本計画に基づいた各種の活性化プランが練

ているのは大仙市の各地域名(大曲、太田、協和、中仙、仙北、南外、神岡、西仙北)の読みの頭音を組み合わせたものだ。
実際、867kmの広大な市域に8つの個性豊かな地域を有する大仙市の「大きな背中」には、多様な価値観や生活環境を持った人々が一緒に乗っている。そして今、地域協議会の活動や農業振興をはじめとする各種の活性化施策の実現に向け、市民と行政が共に手を携えて大きな一歩を踏み出そうとしている。まさにそんなイメージやみんなの願いが髣髴としてくる、象徴的な都市像である。
(取材・文 遠藤 隆)

た環境を活用し、市内3カ所(神宮寺地区、大曲地区、角間川地区)の河川周辺の地区にフットパスルートの整備を進めるなど、河川環境の活用と維持・保全が多角的に進められている。
「大曲地域での鮭の放流と孵化事業は明治28年から始まりました。現在も大仙市鮭孵化放流事業組合と雄物川鮭増殖漁業生産組合によって、伝統が脈々と受け継がれています。米作り、野菜作りも含めて、大仙市がいかにかに河川の恩恵を受けているかが分かります。この素晴らしい地域資源を、私たちは未来永劫、伝えていかなければならないと思っております」(栗林市長)
河川がもたらす恩恵という意味では、「大曲の花火」として知られる「全国花火競技大会」の開催地が雄物川の河畔であることも、もちろん忘れるわけにはいかない。

花火のまち大仙市の「おおきなせなかに」

大仙市大曲地域で毎年8月に開催される全国花火競技大会は、長岡市の「長岡まつり大花火大会」、土浦市の「土浦全国花火競技大会」とともに日本3大花火大会といわれている。3大花火大会はいずれも全国から多数の観客が詰め掛けることで知られ(大仙市と土浦市は1日開催で約70万人、長岡市は2日開催で約80万人)、花火にもそれぞれの特徴がある。大曲の花火の特徴は、花火は丸いという既成

概念を破り、四角い花火を夜空に描いたことさえあるという事例が示すように、その飽くなき創意工夫にある。
花火が生活に密着しているという意味でも、大仙市は全国屈指のまちといっていだろう。例えば大仙市の表玄関・大曲駅に着き、大仙市の中心市街地を歩いているとしばしば、訪問者は「花火暦」というポスターを目にすることになる。
各商店のウインドーや公共施設の掲示板などに張られたこのカラフルなカレンダーは、大仙市の各地区で毎月行われている花火大会の「年間スケジュール」なのだ。花火大会といわれる日本でも、花火大会が毎月行われ

ているのは大仙市だけだろう。
「文化・文政期に書かれた菅江真澄の『月の出羽路』という本に既に大曲の花火が紹介されているほど、この地域の人々にとって打ち上げ花火は、昔から非常に親しみのある行事なのです。またそうした伝統を背景に、地元の花火業者が次々と革新的な花火を開発してきた歴史などもあり、全国の花火師が新作や自信作を持ち寄って発表する大曲の全国花火競技大会は、歌手にとつての『紅白歌合戦』のようなものだといわれているほどです」(栗林市長)
中心市街地のメインストリートはその名も花火通り。さらに花火通りには空き店舗を活



大曲地域の花火作りは明治時代からの有力な地域産業 (撮影協力・株式会社小松煙火工業)



花火通りのにぎわい創出施設「花火庵」に展示されている打ち上げ花火関連の実物モデル(大曲花火屋)